

芝の会における自主的な学びを生み出す基盤と学びの内実について

范, 嘉存
九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/7172577>

出版情報 : 社会教育研究紀要. 5, pp.29-35, 2024-02-29. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

芝の会における自主的な学びを生み出す基盤と 学びの内実について

The Foundation and Essence for Creating Self-Directed Learning in Shiba no Kai

范 嘉 存^{*}
Fan Jiacun

1. 研究目的と研究方法

本研究は、1985年に福岡市主婦卓球愛好会（以下、愛好会）から誕生した女性の自主学習グループ芝の会における自主的な学びはいかに愛好会との有機的な結びつきの中から生み出されたのか、また芝の会の学習は学習者個人、そして基盤としての愛好会にとってどのような意味を持つのかを探究することを目的としている。

これまで、女性の自主学習グループと学習をする女性への支援の基盤は行政や公民館をはじめとする社会教育施設の枠で論じられてきた。例えば、藤原千賀（2004）は東京都中野区の女性の学習活動と主体形成、および教育行政との関わりについての考察を通して、婦人団体連絡協議会が女性の自主的団体というより、行政の末端組織として役割を担っており、学習の場として女性の主体形成を期待することは難しいことを指摘した上で、婦人学級修了後も自主グループを立ち上げ、小集団による学習として、女性の主体形成を進めていることを示した¹⁾。また、遠藤和士（2006）は大阪府吹田市の地区公民館での調査を通して、活動場所としての施設、またその設備・備品の整備・拡充、自主グループ活動のきっかけづくりの必要性を明らかにした²⁾。公民館以外の視点では、吉田右子（2013）は図書館を拠点とした女性のエンパワーメントに関わる活動及び図書館自体を学びの対象とした自主的活動に着目し、自主的学習グループの活動者が公共図書館という活動の拠点を基盤として自分たちで学習を組み立てていき、それらの自発的学習実践が生涯学習機関としての図書館の持つ固有の性質と結びついた活動であることを解明した³⁾。

しかしながら、行政や社会教育施設の枠にとらわれると、本来多様なはずの女性の自主的な学びを育む基盤の可能性を見落とす危険性があるように思われる。さらに、行政や施設の視点では、「組織化」という見方をとるため、学ぶ主体としての女性たちの声、特に自主学習グループを根底から支える女性自身の学びに対する意識は十分に捉えられていないと言える。そこで、本研究は社会教育関係団体としての福岡市主婦卓球愛好会から誕生した自主学習グループ芝の会に焦点を当て、芝の会における自主的な学びは愛好会という基盤からどのように育まれたか、そして芝の会の学びの内実を解明することで、より広い意味での社会教育環境と女性の自主学習実践との相互関係を描き出したい。

研究方法として、芝の会の会報分析（1号～12号：1985年～2017年）、芝の会の会員へのグループインタビュー、愛好会・芝の会の活動に初期から関わる会員（中原圭子さん）への個人インタビューを行った。

^{*}九州大学大学院人間環境学府修士課程

グループインタビューでは、会員がどのような経緯、思いで芝の会に入ったのか、参加し続ける動機、芝の会を通して得た学び、そして受けた影響、生活への波及、愛好会の活動との関連付けについて調査した。個人インタビューでは、芝の会誕生の経緯、長い間に変わらない、変わったもの、芝の会の講師との関係性に焦点を当てて話を伺った。

2. 芝の会における自主的な学びはいかに生み出されたのか

芝の会は愛好会のリーダー研修会と会員研修会のあと、もっと学習を続けたいという声を受け有志により、1985年9月に発足し現在に至っている。発足当時、一部の愛好会メンバーは「卓球を通して技術を追い求めることよりも、話し合い、考え合うことが必要だ」⁴⁾と意識し始めた。彼女たちには、愛好会における学習の領域の限界性と実施の単発性、学習内容の固定化を打破したいという気持ちがあった。そこで、学習をもっと充実させたい、自分たちのものにしたい、意見を述べ合いたい、と仲間が集まって、芝の会という「より広い長い目を育て」、人間・女性の自立を目指す会を立ち上げた。

ひとりひとりが持っている生きる上での自由は尊重されなければならないけれども、欲や権利を主張するばかりでは何もならない、そこには「知らないことを知る」ことが必要になってきます。周りの実情や、考え方を勉強していくことなのです。ひとりひとりの考えが違ってあたりまえとおっしゃる先生に、広い長い目でみて頂きながらの学習会ですが、「人間の生きる権利を侵すものは何もない、ぬくもりを忘れてはならない」と思うのです。生活の担い手である主婦の小さな積み重ねの学習は少しずつだけ家族の幸せに継がるような気がします。⁵⁾

学習の組織方法は各講師の担当時期によって少しずつ変わるが、基本的な主軸は社会教育関係を専門とする講師と共に身近なテーマをとりあげ、講師は専門の立場から、会員は思い思いに意見を述べ合うような形で行われた。具体的には、月に一回、福岡市内の公共施設、主に「あいれふ」を会場に新聞の切り抜きや、身近な地域の問題をテーマにして学習を重ねている。これまでの学習テーマは多岐にわたり、日本の学校、教育、主婦とおんな、人間はどこまで動物か、戦争と平和、組織と個人、人権問題、社会教育、憲法、選挙、時事問題、地域問題など⁶⁾、幅広く現代社会の本質的な問題を学んできた。

芝の会は主婦のスポーツ団体から生まれた稀有な自主学習グループでありながら、狭義のスポーツ概念の枠にとらわれず、さらに先述した多様な学習テーマの通り、特定の問題やテーマにとらわれず、学びそのもの、知る自由、学ぶ意欲を重視しているグループでもある。では、このような芝の会における自主的な学びはいかに実現できているのか。以下では、芝の会の結成、学び文化の育成に関与した主体から答えを探したい。

(1) 前田恒子会長と「葦の会」

芝の会の創始者は愛好会の初代会長前田恒子さんである。前田さんは1969年に夫の転勤のため知人の全くない福岡に引っ越してきた。最初、周りとのつながりを失い、憂鬱な気分になってしまった時期もあったが、公民館の主婦卓球を通して周りとのつながり感覚を取り戻し、憂鬱な気分から抜け出すことができたという。

公民館での卓球活動をきっかけに、前田さんは多くの人々と出会って、特に公民館主事や大学教員との交流が始まり、多様な活動に触れる機会も増えた。そのような中でも、福岡市教育委員会が主催した視聴覚手法を用いた共同学習「家庭に於ける新しい人間関係」の学習会に参加し、その学習会の一部の参加者

で発足した自主学習グループ葦の会の代表としても活動していた。葦の会は鳥飼公民館事業の一環に形式的に位置づけられ、文部省委嘱婦人学級として「これからの日本をどうする」という学習課題に取り組む会であった。実際、葦の会は芝の会の前身として位置づけられる存在である。前田さんは葦の会の代表として培った学習組織の経験と社会課題への強い学び意識、そして公民館をきっかけに広がった活動の幅から得られた主体的な行動の活力を芝の会に持ってきたと言えるだろう。また、前田さんは葦の会の代表という視野を抱えこみながら、当時鳥飼公民館在勤中の田岡鎮男さんとの関わりを始動させていった。以下では、その愛好会と芝の会の活動の発展に必要な不可欠な存在であった田岡さんと芝の会との関わりを記述したい。

(2) 社会教育の講師との関わり

田岡さんは愛好会の発足以来、社会教育領域の指導者として関わり、その関わりの中で愛好会のメンバーたちと「親子」のような関係を築いた。彼は愛好会にとって頼りになる存在であり、力強い支えを提供していた。

先生から見ると、私たちは子供のように感じられたかも。また、逆に私たちからは力強い父親なのです。(中略) 時にも宿題がありました。それは、会長になった年の春でした。何事も初めての経験で緊張している時、小さな紙に「社会教育法」「スポーツ振興法」「市民センター条例」と書いて、「これだけは勉強しておきなさい」と言って渡された時は、大変だと思いました。何事も自分で足を運び、目で見、耳で聞いて判断しなさい、人を頼ってはだめですよ。多くの場に出かけ積極的に自分で取り組み前進しなさい。が先生の教えでした。⁷⁾

このような関係性に加え、田岡さんの高い教育の専門的知識もあり、芝の会が発足した当時、田岡さんは講師に招かれた。彼は学習者の要望を軸に自身の示唆を交えながら芝の会の学習の方向性を定めていた。さらに、芝の会が自主的な学習を維持できるように、常に学習の流れ、学習者の課題意識の微妙な推移、学習意欲の揺れ動きなどを観察しながら、対策を考えていた。学習の組織をサポートするだけではなく、田岡さんは芝の会の会員一人ひとりと真摯に向き合い、芝の会の会員の成長を支え、尊敬され、愛される存在ともなっていたのである。

私が本を読んだときにすごく感動した本があって、あれは林語堂という人、中国の方ですけど、「人生いかに生きるか」だった。その感想文を田岡先生にハガキで書いたんですよ。褒めてもらえました。(中略) 田岡先生はね、万年筆で書かれる。味のある字ですよ。ね。「いい本を読んでおられますね」だったな。それとまたその違う場面ですけど、会報をご覧になったと思うんだけど、わかりやすい文章を書かれるっていうふうに褒められたこともあります。そういうのもやっぱり力になりますよね。めったに褒められないから。褒めて育てられたかなって感じです。⁸⁾

田岡さんは芝の会における自主的な学びを専門的な力で支えながら、会員ひとりひとりの深い関わりを通して、自身の魅力的な人柄で魅力的な学びをつくり、グループの絆を築き、発展へと導くことができたと言えるだろう。田岡さんの影響は、今でも芝の会の中に残っていることが会員たちの語りから窺える。

(3) 愛好会精神の継承

愛好会における学習の領域の限界性と単発性、学習内容の固定化を打破したいという愛好会の卓球活動

から生まれた問題意識で芝の会が派生した。芝の会を生んだ愛好会という基盤は芝の会に影響している。その影響は芝の会の活動へのきっかけづくりやももとの仲間関係にとどまらず、芝の会の方針にも反映されている。愛好会の理念を最も表すことができるものとして、「愛好会の主旨（八か条）」がある。その八か条からいくつかを抜粋すると、「第1条 誰からも強制されることなく目的を持ち」、「第5条 ひとりひとりの権利を認め、思いやり考え合うことの大切さを話し合い」、「第6条 みんなで決めたことは、みんなで守る⁹⁾」という約束ごとがある。これらの愛好会の主旨は芝の会活動の軸と一致していることが見える。

そうですね。その人その人の持っているものを犯しちゃならないと思うし、これは私の個人的なことかもしれないけど。お互いに、俗な言い方でリスペクトする。そこが一番根本かもしれないね。¹⁰⁾

芝の会は平等かな。いろんな意見が聞けるし、誰かが正しいとか誰かが強いっていうのでもなさそうなので。¹¹⁾

ひとりひとりをリスペクトし、ひとりひとりの意見を大切に、学習テーマを最初に決める段階から話し合い、みんな平等で楽しく学べる芝の会は愛好会の限界を打破しながらも、愛好会の精神を継承し、活動の礎として受け止めているのである。愛好会という基盤は芝の会の自主的な学びを生み育てた土壌であると言っても過言ではない。

3. 芝の会における自主的な学びの意味

以下では、芝の会における自主的な学びは学習者個人にとって、そして愛好会という基盤にとって、それぞれどのような意味を持つのかを明らかにしていきたい。

(1) 学習者個人にとっての意味

知る楽しさ、考える楽しさ

芝の会の会員との対話の中で、「楽しい」という言葉が頻繁に登場した。その「楽しさ」について深く探究したところ、彼女たちは「知らないことを知るのは楽しい」、「意見を聞くのは楽しい」、「違いを感じるのは楽しい」と語った。

結構ね、いろんなことを知るのは楽しいです。自分の知らない世界の本を読むのも楽しいですし、皆さんの意見を聞くのも楽しいです。自分と違っててもそれなりに楽しい。こんな考え方もあるんだとか。自分はこう考えてたけど違ってると。いろんなそういうちょっと違うことを知ることが楽しいです。

今はもう皆さんの意見も聞けるし、とても自分的にはもうちゃんとしなきゃっていう思いで参加します。

素直に何か違う違うっていう、わくわくして取り組んでっていうか入らせてもらいました。¹²⁾

彼女たちの発言から、芝の会のメンバーは学びそのものに楽しさを見出していることが分かる。彼女た

ちは新たな知識や視点を得ること、他人の意見や考え方を聞くことによって自分自身を広げ、さらに違いを感じることで多様性を尊重する姿勢を培っている。このような学びの喜びや対話の醍醐味を通じて、彼女たちは互いに刺激を受けながら成長していると言える。とりわけ、芝の会では本質的な問題を探求する機会が多いため、このような主婦たちが普段の日常生活であまり触れる機会のない話題について、一緒に資料や本を読んだり、意見をシェアしたりすることは、彼女たちにとって芝の会以外にはなかなかない貴重な場となっているだろう。芝の会の学習者たちにとって、知らないことを学ぶこと、そして意見の統一を求めず、多様性を楽しんでいる姿勢は芝の会における学びの意味につながっているように思われる。

自分自身を見つめ直す時間

芝の会の学習者は知ることや考えることの楽しさを経験しながら、社会課題だけではなく、知る、考える対象を社会に身を置く自身にも当てはめている。彼女たちは芝の会の学習テーマをきっかけに自分自身を見つめ直し、主婦、女性、そしてひとりの人間としてのあり方を再形成していく。

ところで、「日本女性史」の学習は、自分が女であるだけに、慎重にかつ興味深く取り組んでおります。社会的な状況がどうであれ、いつの世も、女のしたたかさをみることができるとですね。不思議なことに、神様は男と女をおつくりになった。しかも豊かに感じる事ができる「心」までくださった。子どもの為じゃない、夫の為でもない、社会の為というきれいごとでもない。自分自身のわがままでないところの自由な心のままに生きていけたらどんなにいいでしょうね。時には風に吹かれ、水に流されても、自分を見つめることができたなら、それでいいと思うー（中略）いつの世も人間はしたたかに生きれる。人生八十年として、今私は半分の所にきました。まだまだ半人前です。でもがむしゃらでなくなって、生き様を考えるようになりました。¹³⁾

自分自身を見つめ直し、内面的な変化を求めるにとどまらず、彼女たちは積極的に自分自身を表現し、自分の意思を自ら伝えられる、他者と対等に会話ができるようにもなっている。

私も諭吉さんを見習って、自分の考え方を言葉をつくして周りの人たちに解って貰えるように話さなければいけないと思ったものです。¹⁴⁾

卓球はできてたんだけど、人との討論の中で理路整然とボンボンと、この人とある人と討論をしたときに違うと思ってても、自分で言葉が出なくて、なんか自分の違うっていうだけで、何をその人に違って言えるのかっていうもどかしさとかですね、学びが必要だなと思って（中略）何かその人と対等に会話ができるっていうことが自分をもっとしたいなと思う。¹⁵⁾

以上触れたように、芝の会の学びは学習者たちに自分自身を再発見する機会を提供することによって、長年主婦や女性の立場から感じた「弱い」感覚からの脱却を促した。学習者たちは女性として、ひとりの人間としての価値、強さを感じ取り、主体性を取り戻すことができたと言える。

(2) 愛好会活動に還元される芝の会の学び

前述のように、芝の会は愛好会の限界性を打破したいという問題意識から生まれた会であり、愛好会という基盤の影響は芝の会の立ち上げと発展に浸透していることが明らかにされた。実際、愛好会からの一方的な影響だけではなく、芝の会の学びも愛好会活動に還元されている。芝の会において、会員たちは卓

球、体育だけではない角度から多面的に学び合い、知り合い、関係を深めていく。これによって、卓球や体育といった単一の面の限界性を打破し、「生活とスポーツを結びつけながら、より豊かな人間関係を求める」という理念を掲げる愛好会の礎を固めているように思われる。芝の会は愛好会の枠を超えた活動を展開しているけれども、より充実した人間関係の構築と広い視野での学びを通して愛好会の長続きにも貢献していると言えるのではないだろうか。

だから卓球の技術の差で人は見ないし、やっぱり自分も一面だけで見て欲しくないと思うし、いろんな面を持つてるからそんな面で付き合いしていきたいなっていうふうに卓球を抜きにしてもですね。根本的なもんですよね。人との付き合い方として。大会運営の愛好会、卓球するだけの愛好会じゃないってこと。そこが長続きしてるかなと思います。¹⁶⁾

また、芝の会のメンバーの中には愛好会の役員を務めている人もいるため、芝の会は愛好会の組織運営の力量の増幅に貢献する場ともなっている。前会長田中理恵子さんの話によれば、愛好会が改革の時期を迎えた際に、芝の会は相談と愛好会の課題について話し合いの場として重要な役割を果たしていた。

改革っていうかね近づこうとしてももうね、既に会費は値上げされてる。ただ呼び起こすのは月例会であるとか、芝の会であるとか、そういうところをちょっと会報に載せて、皆さんにお知らせしよう。みんなで決めたことはみんなが知るようにしようってことで愛好会だよりも出そうっていう。そういうのをここで学んだ。先生の助言もあって、どうしたらいいですかねっていう一つ一つここでちょっとみんなで話し合ってもらって。¹⁷⁾

さらに、以上のような相談の場として直接愛好会の運営組織に貢献するにとどまらず、一人ひとりの意見、活動価値を大切にするという愛好会の精神を受け継いだ芝の会では、さらなる学習を通して、平等性という愛好会の芯の部分会員の中に強化、浸透させた。芝の会は幅広い領域への関心と学習意欲を持つにもかかわらず、卓球を中心に活動してきた愛好会という原点から受け継いだ精神をちゃんと守って育んでいるのである。何より、愛好会の活動では「卓球」という活動形式で現れた多くのメンバーの中では言語化しにくい部分を芝の会の学習、話し合いを通して、意識し始め、そして自分なりに受け止め、自分の言葉、行動で表現できるようになった。

ここで学んだことが自分を変えられたし、それが例えば卓球のサークル活動の中でも平等性であるとか、一人一人リスペクトするとか、何か技術が上手い下手に関わらずって、その通りを。何かスポーツの世界に行ったら卓球上手っていうだけで結構、なんか上から物を言ったりするんだけど、愛好会は卓球できるけんなんね。そういう人間としてなんぼかって見てくれるので。そういう点すごく原点はここにあるかな。¹⁸⁾

芝の会は愛好会の派生である一方、会員の「意識、ものの見方、考え方に巨視性と深まりが徐々に芽生えつつある」¹⁹⁾という愛好会の進化と継続性に必要となる場でもあると言えるだろう。

4. おわりに

芝の会では、幅広いテーマについての学習と話し合いが行われ、会員たちにより広く生活環境をとらえ

る、そして本質的な社会問題に触れる機会を提供することによって、学習者の女性たちが自己を見つめ直し、主体的な感覚を取り戻せる場が形成されている。このような場が実現できたのは、基盤としての愛好会と愛好会に関わる人々が芝の会を支えてきたからだと考えられる。

また、芝の会と愛好会の長年にわたる有機的な関係が続いている理由を探ると、愛好会からの単方向の関与ではなく、お互いに響き合って、車の両輪のように関係し合っていることが考えられる。田中前会長はインタビューの中で、「そう、ここで学び考えることが必要と知ったおかげで、学ぶことと活動することの両輪が必要だとわかった。自分の中のバランスは卓球をして、やっぱり常に学びが必要だし、人との関わりの中でここで学んだことが、チャンピオンスポーツとしての卓球をしていただけだった私にとって、すごくよかったです²⁰⁾」と話された。会員たちに内面的な成長と豊かな人間性の醸成をもたらす「学ぶ」ための芝の会、と卓球をめぐって「活動する」ための愛好会という両者の連携の中に、学ぶ/活動する会員同士のつながりが生まれ、豊かな人間関係のもとに、お互いに刺激し合いながら成長していき、より充実した人生を築いていく姿が見られる。

【注】

- 1) 藤原千賀「婦人学級・自主グループと女性の主体形成に関する一考察」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第12号、2004、149-159頁。
- 2) 遠藤和士「自主グループ活動に対する支援のあり方に関する研究」『大阪大学教育学年報』第11号、2006、93-104頁。
- 3) Yuko Yoshida, “Public libraries as places for empowering women through autonomous learning activities”, Information Research, Vol.18, No.3, 2013.
- 4) 中原圭子「芝の会」『芝の会会報』1号、1985、1頁。
- 5) 同上。
- 6) 『芝の会会報』12号(2017)、27-32頁「芝の会のあしあと」を参考にした。
- 7) 池田矩子「田岡先生」『芝の会会報』5号、1992、6頁。
- 8) 中原圭子さんへのインタビュー(2023年3月23日)
- 9) 愛好会会報48号(2020年)、2-3頁。
- 10) 中原圭子さんへのインタビュー(2023年3月23日)
- 11) 芝の会の会員へのグループインタビュー(2023年3月22日)
- 12) 芝の会の会員へのグループインタビュー(2023年3月22日)
- 13) 中原圭子「拝啓 芝の会様」『芝の会会報』3号、1989、13-14頁。
- 14) 加藤祥子「諭吉さん有り難う!」『芝の会会報』11号、2015、8-9頁。
- 15) 芝の会の会員へのグループインタビュー(2023年3月22日)
- 16) 中原圭子さんへのインタビュー(2023年3月23日)
- 17) 芝の会の会員へのグループインタビュー(2023年3月22日)
- 18) 同上。
- 19) 田岡鎮男『さいはての社会教育』(自己出版)1988、329頁。
- 20) 芝の会の会員へのグループインタビュー(2023年3月22日)